
6.3 心の問題と情報倫理

(1)感情・好奇心・無知

■感情の高ぶりの問題

情報倫理綱領や規則を制定し、制定した組織の構成員が綱領や規則を理解したとしても、人間としてのやっかいな問題があります。それは、人間は理性的動物であると同時に、感情の動物であるということです。

他者からの軽蔑・虐待を受けたり、立場や金銭的な被害を蒙った場合、感情が高ぶり、悪意が産まれます。従業員や元従業員によるコンピュータ犯罪の多くは、この悪意による「仕返し」ともいえます。ただし、悪意による「仕返し」は、従業員や元従業員の道徳性だけの問題ではありません。納得できない解雇命令、雇用主と従業員間の感情的なもつれ合いなどが悪意を生じさせています。

企業と従業員との関係、企業内人間関係、従業員のモラル、その他の企業文化に関わる問題が、従業員や元従業員の行動に少なからず影響を与えているのです。情報倫理に関する規範について議論する前に、まさに情報行動の「土台」となる、これらの問題をクリアする必要があります。不満な状況に陥ったからといって、犯罪的行動に至ったことを正当化するわけではありませんが、特定の個人を、悪意による行動に追い込んだ周りの環境をも考慮にいれない限り、犯罪行為の減少は望めません。

こんな譬え話があります。愚かな金持ちが大工を呼んで3階建ての建築を頼みました。大工が土台を作り、1階を作り、2階を作るのを見て、もどかしそうに金持ちは言ったそうです。「私が頼んだのは、3階の高楼だけだ。早くそれを作れ」と。

「情報倫理問題」という「3階の高楼」を構築する前に、まさに情報行動の「土台」となる労使関係、法制度、不正行為を行いにくい